

## 中島広足往来抄(一)

白石, 良夫  
純真女子短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/16310>

---

出版情報 : 文献探究. 2, pp.5-16, 1978-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

中島 廣足 往来抄 (一)

白石良夫

幕末の国学者中島広足は極めて交友範囲の広い人物である。本居学派の思想・国語学を受継ぎながら、反本居学の橋守部の学問を高く評価し、和歌は江戸派の一柳千

古門であるにも拘らず、桂園派にも近づいている。が、こういった現象はひとり広足に限らず、当時の学界の趨勢であった。学問が細分化してきた近世末に於ては、学問の細分化の故に、おのれの学派にのみ泥

むことが許されなくなったのである。広く他派の学説に触れ、自由な雰囲気の中で自己の学問を練磨させることが、当時の学界のあらかたなのであった。かかる時代に生

きた彼らの交友関係を見てゆくことは、伝記研究のみならず、相互の学問の交流、学界の状況を窺う上でも極めて有効な方法であろう。

ここに広足の交友録を作製せんとするもの、そこに意味がある。訪問・来客は勿論のこと、書翰のやりとり、書物の貸借に至るまで、管

見に入った文献から細大漏さず拾い集めてゆくことにする。

〔一〕本居大平

長崎諏訪神社旧蔵(4)『文詞』の末尾に、

文政十二年十一月七日の夜までに時々と

り出て見終りぬ 大平 (印記)

とある。該書は広足自筆本に、朱で大平が添削を加え、その後広足のもとに送り返されたものである。大本、二巻一冊。仮綴で、表紙に「稿文章」内題「文詞上(下)」(□の部分、ヤブ・ヨゴレ等により判読しがたいもの。以下同)。下巻

内題下「広足」の署名の下に大平筆で「上」と記す。尚、表紙右隅に広足の筆で書付があるが、破損・汚れて殆ど読めない。「秋」

の秋、大平の □ に見せ □ に同十三年の春 □。二十三箇の文章を集めてあり、うち十七箇が『檀園文集』(5)に収録され

ている。それらの本文を比較すると、大平の添削を大幅に活かしている。

大平は宣長門の稲垣棟隆の子。初め名を茂種。通称三四右衛門。藤垣内と号す。早くから父と共に宣長に学び、宣長の晩年にその養子となつて家学を継いだ。宝暦六年二月十七日生れ。広足に長すること三十六歳。天保四年九月十一日没。享年七十八。『内遠翁門人録』(中)中「亡父門人文通不絶分」に「中島太郎広足」の名がある。弥富破摩雄氏は、広足と大平との關係が、文政二年に人を介して自著を大平に呈したこと以外に全くなかつたと言われるが(7)、該資料及び次項の資料などから弥富説は再考の余地がある。

〔三〕本居大平・青木永章

諏訪文庫本ではないが、長崎県立図書館に『広足歌稿』・『広足草稿』・『広足文詞』と題する三冊の写本がある。いづれも元來は仮綴で表紙はなかつたものと思われるが、後人の手によって厚手の白表紙が付けられ、書名も右のように書付けられている。『広足歌稿』一丁オモテの右隅に、

今日飛脚立候由、朝ノ内永章ヨリシラセ  
來候。俄ニ相認候間、書損多く、傍ニ  
〱。俄ナル丁故、旅中在合ノ鹿紙ニ相  
認候故、御免可被下候。

という大平宛の書付があり、本文を大平が添削して最後に、

此貢物、長歌ハヨクト、ノヒソナハリテ、  
コトニ実ヲ記詞モオモシロク、感賞カキ  
リナク候。早々御清書、御贈リ可被下候。

大平

とあつて、本文一行目の「広足」の署名の下に「上」と記す。「永章」は青木永章。「旅中」は長崎滞在中のこと。「広足文詞」の最後には、

早苗・初丁ニ章は清書しておくり給へ。

大平

とある。該書には「閑中春雨」・「早苗」・「初鷹をきく」の三つの文章がある。これらは『檀園文集』第三集に収められているが、大平の添削は活かされていない。これら三冊は、文字・書入れの感じから、同時に大平に送り、同時に送り返されたものであろう。

青木永章は長崎諏訪神社宮司。丹波守。玉

園・秋の屋と号す。天明七年生れ。広足より五歳の年長。大平門であるが、香川景樹・橋守部などにも学んだ。広足が文政五年十月に初めて長崎に行った時以来ずっと深く交った。弘化元年七月十日没、享年五十九。尚、永章の名は一般にナカアキと訓まれているが(8)、諏訪文庫本の中に「奈我布美」という蔵書印の捺されているのがあり、ナカアキと訓むべきであろう。

広足が大平と相識るのが文政二年、永章とが同五年、大平没が天保四年であるから、該書の往復は文政五年から天保四年の間になされたということになる。

〔三〕和田巖足・木山直秋・河上健雄・

吉永直雄・吉永秀雅・本間素当・

高本紫溟・岡松某・知足寺・

芋栗園・明円寺・藤崎宮・

浄妙院・某法師・井芹某・

浄土寺・竹林某・長瀬真幸・

和田亭・吐月亭

次に諏訪文庫蔵『文政五年詠草』(9)を採りあげる。筆者は先に、該資料を使っ

て稿を草したことがある(10)。稿中、該書を「新資料」と不用意に言ったが、既にこの資料を使用した論文が岡中正行氏にあることを後になって知った(11)。深く御詫びする次第である。該書は文政五年から同七年初春にかけての自筆草稿であり、その書誌や資料的価値については拙稿に述べておいた。本稿では、この中から広足の交友を見てゆくことにする。

#### ① 和田巖足

友なりける人の、つみありて野坂の浦わたりにうつされるたりけるを、六月の望ばかりにはるく、たづね行て、ニ三日ありてかへるに、舟さしつづるほど月のいとあかきに、なまきさまでおくり来てわかる、ほど、なみだといめがたし。罪なくてとは見はやとは、こよひの月をやしふべからんなどいへるに、  
君が為おもふおもひはわれもまたなくさめがたき夜は9月哉  
かへるなみもうらやましやなどいへるに、  
しばし君かくておもひはしづむとも浦わ

のなみのかへらぶらめや

(二ウ)

詞書の「友なりける人」は和田巖足のこと。巖足は天明七年の生れ。広足より五歳の年長。名は始め千尋チノヒのち巖足(伊豆足)。又真震マユリ(馬百合)と称す。通称震七郎。号は釣龍翁。熊本藩士で、国学と和歌を長瀬真幸に学んだ。万葉調の歌を能くし、自ら国士を以て任じていたが、藩士の事件に連座して八代城に左遷され、嘉永二年に更に辺境の佐敷に流され、熊本に帰ることなく、安政六年四月二十七日、その地で没した。享年七十三(四)。「つみありて野城の浦わたりにうつつされるたりける」とは、即ちこの左遷のことを指す。

扱、右の二首を含む一丁ウラの歌八首について、拙稿に於て、元来白紙であったものに、該書成立後に書付けられたものであることを述べた。そう判断した理由として、これら八首が題簽の「文政五年自六月／至十二月／同六年同七年初春」という書付と符合しないことを指摘したのであるが、右の詞書の記事もこのことを裏付けて証左となる。以下、それについて述べる。「野坂の浦」は『万葉集』卷三に「葦北の野坂の浦中船出して水島にや

かむ波立つなゆめ」と歌われて以来の歌枕であるが、その所在は古来はつまりしてない。広足は『野坂のうらづと』(三)に、佐敷へ行く途中で、「野坂のうらは、今其名はのこらねど、此浦なりといへり」、又、『相良日記』(四)に、「野坂の浦はさだかならねど、今の佐敷の津のあたりならむと或人のいへる」と言うように、『新撰事蹟通考』(五)の「野坂ノ浦ハ葦北の海浜ヲ無慮テ斥云名ナリ」に近い説を採っており、詞書「野坂の浦わたり」というのは、八代から佐敷にかけての海岸線を指したものであると思われる。そこで、この「野坂の浦」が佐敷を指すとすると、この歌の製作が嘉永二年以降になり、『詠草』の成立時期から三十年近くも隔ることになる。ここは八代を指すと考えるのが自然であろう。ところが、八代を指すとしても、この歌が文政五年六月から同七年春までの間に製作されたということにならぬのである。即ち、巖足が八代に流されたのが文政五年八月であるから、詞書「六月の望ばかり」の日付がこの『詠草』中にあるはまるとすれば、文政六年六月しかないのであるが、『詠草』にはその時期のところに、

「此間旅三行。紀行アリ。十かサキ也」とある。即ち、紀行『後夢路日記』(註)に記された旅行であり、それに拠れば、広足はちようどこの頃、長崎に於て近藤光輔や青木永章と歌を詠みあつており、八代に行つたようない形跡はない。従つて、右の詞書「六月の望ばかり」は大政七年以降のこととなるが、今その年次を決める資料を知らない。

## ② 木山直秋

むかし木山直元、歌の添削を契沖(さき)にこふとて、「こころのみつくしのあまのもしほ草かきあつむれどことのほもなし」とよみて送りける。契沖(さき)其歌に添削して返すとて、「こころをばつくしのうみのもしほ草さらにそふべきことのはぞなき」と書そへたるを、一卷として其末の木山直秋がひめもたるをかりて、うつして返しけるついでに

もしほ草かきそへてこころののはの玉の  
光もあらはれにけれ  
なには江のふかきこころをくみえつ、つ  
くしのうみのあまぞかしこま

直元はもの書ことにひで、いとうるはしき草のあと、今も多く直秋(其家)かつたへもたるをかりて見て、今の直秋(其家)は此かたの学びにこころざしあれば、いひ遣しける。

そのかみのおもかげ見ゆる水くみのあと  
をさながらうつしとらなん (ニオクニウ)  
二丁オモテから二十四丁ウラまでが文政五年  
の分である。右は日付がないが、六月五日と  
十五日との間にある。契沖と木山直元との関係  
は、弥富破摩雄氏「契沖と木山氏」・「微塵集と  
契沖家集」・「契沖と日本紀寛寧歌」(註)に詳し  
い。弥富氏に拠れば、直秋は直元から四代の孫  
で、通称を十右衛門と言つたらしい。又、津々  
良平之丞とも称した。彼の家は契沖の遺墨類が  
多く伝えられていたことは、広足の『檀園隨筆』  
(註)に記されており、広足は彼のことを「ワガ  
善友也」と言っている。

## ③ 河上健雄

閑対泉石 河上方宿題

よの中の夏をぞしらぬ山かげやいはまの  
水に心すまして  
六月二十二日と二十六日との間。広足と同じ  
(四ウ)

真幸門の河上健雄(19)のことであろうが、その伝記は未詳。

4 吉永直雄

七日の夕つかた、よし永直雄がり行て、歌よむに、

織女のおふよの秋の秋風をまつ待えたる

藤さまの囀

(五ウゝ六オ)

以下に「セタ扇」・「セタ雲」・「セタ山」・「手向のいとし」の題で各二首あり。七月七日。吉永直雄は、山鹿郡の松崎家に生れ、初名は嵩、のち直雄と改め、吉永家の養子となった。晩年に秀俊と改名し、又堅木園と号した。真幸に国学を学ぶ。

5 吉永(?)秀雅

秀雅が手向の歌どもを見て、

五百機の錦にあえしことのほの花の手向

は星やうくらん

(六オゝ六ウ)

前と同日の作。秀雅は未詳。直雄の子か。

6 本間素当

もとまさにいひやる。

此頃のをかべのやど風のすゞしさを君かたもとにゆくよしもかな

(セオ)

七月十九日と八月十三日との間。素当は通称忠助。天明六年十二月一日の生れ。右足に長

ずること六歳。熊本藩士。留守居役として江戸に滞在することが多く和歌を一柳千古に学んだ。右足の千古入門を奨めたのが素当である。右足は自分が病気を理由に致仕した後、素当の弟匡勝を中島家の養子に迎えてゐる(26)。尚、この頃素当は文政八年に出府するまで熊本にいた(27)。天保十二年一月八日没、享年五十六。家集に『本間素当家集』がある(28)。

7 高本紫溟

すゞか川の序

吾国高本順翁は今はむかしの人なるを、其遠祖は韓国の人にて、姓を李とぞいふなる。豊国神、韓国をことむけまし、時はやく加藤清正めしにまつろひて此国にわたり、其末とは吾殿になんつかへ来にける。かくて順翁はわかき時より書よむことに心をしめて、そのかみからまなひのをしへの親にて、教授といへる司なりければ、其まなびにひてられたることはさらにもいはず、しま島のやまとごころさへいみじかりし人にて、大御神の宮をるがみに伊勢へものせられけるついで本

居翁をとぶらひて、へだてなくうちものがたらひ、ふかく其をしへをよろこび、国にかへりて後にも、たよりにつけてたえずことかよはされま。朝夕からごとをまなひながら、しかうるはしきやまとだましひにしもありけるは、いとめづらかなる人かなと、本居翁もいみじくめでられけりとなん。さて後のことぐさに、われはからまなひの司なれば、其かたのまなひにいとまなし。あはれ、やまとだましひもたらん人もかな。すゝのやがをしへのみち、いかで吾国にもつたへてしかなと、人ごとにかたらはれける。其いざなひによりてなん、今の長瀬氏ははやくよりたて、此まなひをしもせられにけり。されば翁は、御国のまなひはたしかたはらのすさびわざなりしかと、其かたれたる文、よまれたるうたは、おほかたの人の及ぶべくしもあらず。さるからに、其をしへをうけしからふみやのとも、そのづから皇国をたふとぶ、ころありま、またなりところの庭に桜を多くうゑて、皇国の花のいばくはしきをいたくめで

られける、其ころはへのみやびたるにても皇国ころのいみじかりしことおしはかりつべし。かくていまのうちにつくられたるからうた、から文は其かたまなぶ人書あつめ、やまと歌、やまと文は此かたふとぶ人な人書あつめける。今ころにあぐる六つの歌、二つふみは、たゞ此翁のころばへをよりにしらしめて、其名をあらはさんとての春臣がをちなましわざになん。から国の人の末、から字のをしへのおやにして、かくうるはしきころもたる人はまさによにあらやは。(セウとハウ) 七月十九日と八月十三日との間。この文章はのちに本居大平の添削を経て(23)、『檀園文集』第一集に収められた。高本紫溟は、名は順、通称慶藏(敬藏)。その先祖は、文中にあるように朝鮮国王族李宗閑という。元文三年生れ、秋山玉山に儒学を学び、天明八年には蕃学時習館の教授となった。一方で和歌・国学への造詣も深く、門下の真幸を奨めて宣長に入門させ、自らも宣長に入門している。肥後国学の発展に果たした紫溟の役割は、広足のこの顕彰に尽きている。文化十年十二月二十六日、



享年七十六歳で没しており、この年、広足は二十歳である。長老の蕃儒紫雲と青年広足とが面識を持っていた可能性は薄いが、今仮にここに挙げておく。尚、文中「ここにあぐる六つの歌、二つのふみ」は未詳。

⑧ 岡松某

水辺秋月 岡松別業小集宿題

白川や梁頼おちくるあゆのかずさへもにくたるあゆさへも見ゆるはかりの秋夜月

雲ほらふ風をさまりて河なみもなまぬる水路に月澄にけり (一〇オ)

以下、当座として「月下待人」・「渡霧」・「樵歌入山」・「忘恋」の題で詠じた九首がある。八月十七日と九月二日との間。岡松某は未詳。

⑨ 知足寺

野草露滋 知足寺小集宿題

霜となるほどやちかけむ秋の野の草のはしろくおける朝露

むさしのやなびくを草のほのぐくとあくるも露の光せけり

以下、当座として「樵路月」・「月前雁来」・「緇素見月」・「田かる所」・「あへ

り」・「夕草」の各題で詠じた九首がある。八月十七日と九月二日との間。知足寺は高田原にあって、浄土宗(註)。

⑩ 本間素当

九月二日、おもひ出つやと素当よりいひおこせければ、

君にしもおどろかされておどろきぬ過る

月日もしらぬ山人 (一一ウ)

⑪ 羊栗園

籬菊 羊栗園小集宿題九月十一日

菊の花うつしうゑつゝ万代の秋をまがきにしめてこそ見れ (一二オ)

右を含めて四首並んでいるが、この歌の右肩に「是出ス」と書付ける。又、当座として「朝野分」・「夜恋」・「寄鳥恋」・「寄獣恋」・「月前水」・「暁天山」・「寄月恋」・「紅葉浅」・「月下擣衣」・「田家見月」の各題で詠じた十二首がある。羊栗園、未詳。

⑫ 明円寺

九月八日のよ、人を野へにおくりけるあしたに、

秋風にたいよふ今朝のむら雲はよはのけぶりの名残とぞ見る (一三オ)

歌の左肩に、「明円寺云々」と書付ける。明円寺は応足の妻ワカの実家。山号は岩男山。熊本水道丁裏にあった(註)。

13 藤崎宮・浄妙院某法師

帯姫命の御兜といへるもの豊前国彦山にあなるを、此ごろ此国の藤さまの宮にもて来て、人々にをがます。そはいみじまいつはりものなれど、かの山なる浄妙院某法師が、歌一つとしひてこひければ、たゞいにしへのさまをおもひて、

韓国をこむけましゝいにしへの神のよ

そひや見のがしこけん (一三〇一-一三〇ウ)

九月八日と十三日との間。藤崎宮は茶臼山(藤崎台)に鎮座する。九州五社別宮の一つ。応足は文政三年に千首歌を、同三年に二百首歌を藤崎宮に奉納している(註)。「浄妙院某法師」「帯姫命の御兜」は未詳。

14 本間素素当

素当より今は紅葉の色もいかに深けんなどいひおこせたるにかへし、木このははまだ染あへぬ秋のいろのふかさを見するをたのをしねか (一三〇ウ)

九月十三日と二十二日との間。

15 井芹某・和田巖足(?)

鷹をよめる 井芹別業小集。九月廿日。和田勸進。

秋をしもいかに契れるかりなれや遠きとこよを出て来つらん (一四〇オ)

右を含めて六首並んでいる。又、「同日当座」として「秋夕情」など二十題で詠じられている。

「井芹」は未詳。「和田」は巖足か。

16 浄土寺

おなじ日かまはる村浄土寺にまうづ。庭のさまいとおもしろし。いはりたゝずまひ、松のすがたもみぢの色水にうつろひて、滝のさまさへこゝろすめり。

わが岡にあざしと見つるむらもみぢ山のふかさにあえて染けるものをつらけり (一七〇オ)

右を含めて五首並ぶ。「おなじ日」は九月二十一日。浄土寺、未詳。

17 竹林某

九月尽  
けふくるゝ秋のけはひは見えねどもしぐれむあすの空やかはらん

右を含めて五首並んでゐるが、この歌の左肩に、「此歌追悼会に出。九月廿九日。竹林小集」と書付ける。「追悼会」は次項を指す。竹林某は未詳。

18 長瀬真幸

秋懐旧 長瀬氏勸進或人追悼会宿題。九月廿九日。一月。

そのかみの秋のわかれの涙さへとりあつめてもしほる袖かな  
過しよの秋さへわけてしのぶかなさらうても露の深き袂に (一七ウ)

以下、「同日当座」として「紅葉増雨」など十一の題で詠じた歌がある。前項に拠つて、この歌会が竹林某の宅で催されたものと分かる。「長瀬氏」は長瀬真幸と思われる。真幸は熊本藩士。通称七郎平。田廬と号す。明和二年生れ。広足に長ずるに二十七歳。始め時習館の早野潜溪や高木紫溟に学んだが、紫溟の奨めで本居宣長に入門し、又江戸に於て加藤千蔭や村田春海らとも交り、真淵の『万葉集』の未刊の巻の刊行に尽力した(29)。宣長門の高弟で、肥後国学の礎を築いた功績は大きく(30)、広足を始め厳足、素当など弟子が多い。天保六年五月二十八日没。享年七十一。広足が真幸に入

入門したのは、赤富氏に拠れば、文政元年頃と言ふ(29)。もっと早く文化十一年に真幸より本を借りて書写してゐる(30)。広足は文化十二年に、真幸の『あそ山のあらびのあげつらひ』に書入れをし(31)、文久元年に、真幸著『上古嫁娶辨』の附録を著し(32)、又真幸没後、『田廬歌集』を編集し跋文を記した。真幸は又、広足の『不知火考』、『檜垣堰家集補註』に序文を贈つてゐる(33)。

19 和田亭

紅葉深 和田亭宿題。十月六日。

露しもの色だに深きもみぢはをさらにしぐれの雨ぞよめける (一九オ)

20 吐月亭

秋の題也。十一月十八日。吐月亭。兼題。縣居大人追悼会。

五すたれもりくる月もさながらにあけやく雪のいろを見る哉 (一九ウ)

21 和田厳足(?)

鷹狩 和田宅会。兼題。一月。

はらちあへぬま袖の雪りさむけさもわするふりかゝるま袖の雪りさむけさもわするをのしみかり人も (二〇オ)

以下、「同日当座」として、「冬田米」・「初冬霜」・「路落葉」・「被厭志」・「恨悔恋」・「霧中席」・「欲別恋」・「待契恋」・「里炭竈」の各題で詠じた十首が並ぶ。十一月十八日と二十九日との間。  
(この項、未完)

【註】

- 1 鈴木暎一氏『橘守部』。
- 2 黒岩一郎氏『香川景樹の研究』・兼清正徳氏『香川景樹』。
- 3 山本嘉持氏『近世和歌史論』。
- 4 現在、長崎県立図書館蔵。以下、諏訪文庫と略す。
- 5 第一集・第二集、及び明治二十六年刊活版本。
- 6 『国字者伝記集成』所収。
- 7 『中島広足』三七頁。
- 8 『和歌文字大辞典』等。
- 9 以下、『詠草』と略す。
- 10 『中島広足の歌風』——『和歌文字大辞典』三七頁。
- 11 『長崎の国字』——中島広足を中心に——

- 1 (『日本文学論究』第三十四号)・「岡部東平伝ノート」(『耕人』第六号)。
- 12 弥富破摩雄氏『和田蔵足とその家集』。
- 13 文政四年の紀行文。『中島広足全集』第一篇所収。
- 14 文政十三年三月の紀行文。『中島広足全集』第一篇所収。
- 15 八木田政名著。天保十二年序。『肥後文獻叢書』第三卷所収。
- 16 『中島広足全集』第一篇所収。
- 17 『近世国文学之研究』所収。
- 18 草稿本。『中島広足全集』第二篇所収。
- 19 弥富氏『中島広足』四七頁。
- 20 同右、二〇頁。
- 21 『続肥後先哲遺蹟』卷八。
- 22 自筆本。国会図書館所蔵。
- 23 『二』の『文詞』。大平添削の本文が『檀園集』に採用された。
- 24 『肥後国誌』。
- 25 弥富氏『中島広足』一九頁。
- 26 同右、三〇六頁。
- 27 弥富氏『万葉考』の書史的考察(『近世国文学之研究』所収)。春日政岩氏「

万葉考をめぐって」(『九大国文学会誌』第九・十号)。

28 宣長と真幸との学問的交流については、

岡中氏「長瀬真幸論——特に本居宣長との交渉——」(『国学院大学大学院紀要』第八輯)に詳しい。

29 『中島広足』二六頁。

30 諏訪文庫蔵『雜問答考』。『万葉集』巻十六は共に真幸本を文化十一年に書写したものである。

31 『中島広足全集』第二篇所収。

【索引】

ア 青木永章

井芹 某

芋栗園

岡松 某

カ 河上健雄

木山直秋

サ 浄土寺

浄妙院某法師

タ 高本紫溟

竹林 某

[二]	[三]	[三]	[三]	[三]	[三]	[三]	[三]	[三]	[三]	[三]	[三]
[15]	[11]	[8]	[3]	[2]	[16]	[13]	[7]	[7]	[17]	[17]	[17]

知足寺

十 長瀬真幸

ハ 藤崎宮

本間素当

マ 明円寺

本居大平

ヤ 吉永直雄

吉永秀雅

ワ 和田殿足

和田亭

[三]	[三]	[三]	[三]	[一]	[三]	[三]	[三]	[三]	[三]	[三]	[三]
[19]	[1]	[5]	[4]	[二]	[12]	[6]	[13]	[18]	[20]	[9]	[9]
	[15]					[10]				[14]	
											[21]